対話指導を考えてみた

―「真面目さ」と「テキトーさ」の狭間で ―

２０１８

久松　功周

広島大学附属中・高等学校
「中等教育研究紀要」第 65 号別刷

広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要
〈第65号　2018〉

対話指導を考えてみた
―「真面目さ」と「テキトーさ」の狭間で ―

久　松　功　周

本稿は，執筆者の対話指導の実践経験から，「対話が続かず，重苦しい雰囲気ができてしまうこと」を指導上の課題として設定し，その解決を図ることで対話活動の機会を担保し，ひいては「正確さ」，「適切さ」，「論理性」といった昨今の英語教育に求められる発話の質を高めることを期待している。その鍵となるのは，「正確さ」，「適切さ」，「論理性」を育てようとする「真面目」な発想から離れるという逆転の発想である。**省略，言いよどみ，繰り返しといった対話における意味伝達に直接的には関わっていないように思えるスキルを指導することを通じて，「これまで間違いに思えていたものが実は対話で重要な機能を果たしている」という発想の転換を促し，「喋りやすい雰囲気を作る」ことが可能となり，それが積極的な対話活動への参加を促し，**最終的に「正確さ」，「適切さ」，「論理性」を育てることにつながるのではないかと考えている。

1．話すこと（やりとり）指導の課題

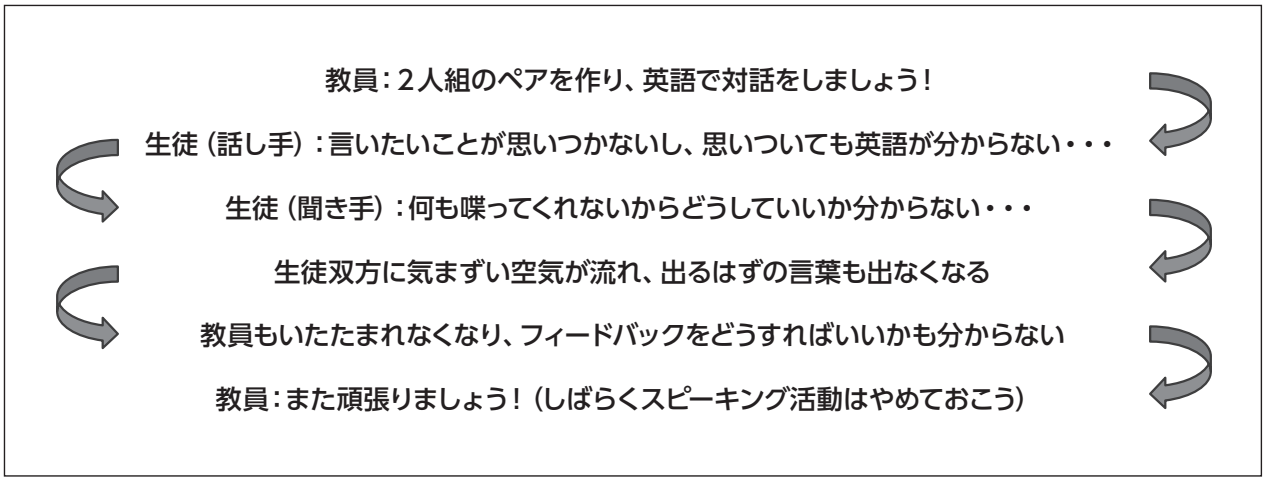

図１：スピーキング活動における負のスパイラル（執筆者作成）

スピーキング指導に取り組んだことがある実践者であれば，上の図１を見て共感を覚える人も多いのではないだろうか。これは執筆者が実際にスピーキング指導に取り組み，そして挫折してきた時のパターンである。生徒のスピーキング能力の向上については社会的に強い関心が寄せられており，また生徒自身も英語を話すことができるようになることへの憧れは強いというのが一般的な考えだろう。しかし一方で，スピーキング指導に対して抵抗感を抱いている教員は多いのではないだろうか。そして，その理由の一端が上の図１に示されていると考えている。本稿では，対話の指導に対して具体的な示唆を与えることを目的としている。指導者の（そして生徒の）感じる，「スピーキング活動って雰囲気が重苦しくなるからやりたくない」からの脱却の一歩目に寄与することができれば幸いである。

Narichika HISAMATSU：Consideration of developing oral interaction ability: focusing on peripheral skills of speaking

２.「重苦しさ」の原因

ここでは,スピーキング活動の機会を阻害する「重苦しい雰囲気」の原因について考察したい。その切り口として，現在の英語教育を通じて，学習者の英語使用のどのような質を高めようとしているかということを考えたい。まず，文法といった言語規則に従っているかどうかという「正確さ」，場面に応じているかどうかという「適切さ」，そして主張が首尾一貫しているかどうかという「論理性」が挙げられることは想像に難くない。いずれにせよ，言語規則や場面，論理構造といった「何らかの規準，尺度」に基づいているかどうかが求められていると言える。従って，指導者としては生徒に「良質な（正確で適切で論理的な）英語」をできれば「たくさん」喋らせたいと，質，量ともに豊かな英語使用を求めるのは自然なことであるし，そうあるべきであろう。しかし，その「あるべき形」を一旦おいて現実的に考えてみると，その「何らかの規準，尺度に基づこうとする」過度な意識が,「気まずいスパイラル」を駆動させ，結果として最終的に学習者の使用する英語の質を高めていくための機会を阻害してしまっているとは考えられないだろうか。我々の日常生活に置き換えて考えても，会議などの場面において,「忌憚なくご意見を出してください」と言われたとしても，自分の意見の質を高めようとするあまり,「自分の考え，言語使用は正確なのだろうか（正確さの欠如)」,「自分の思うことは空気を読めているだろうか（適切さの欠如)」,「とんちんかんなことを言ってないだろうか（論理性の欠如)」が気になって発言できず，結果としてその場に「重苦しい雰囲気」が流れるほど，出てくるはずの言葉も出てこなくなるというのは経験的に理解できるであろう。日々，学校生活において一定の規準に基づいて考え振る舞うことを要求されている生徒が，指導者が思う以上に規準に基づくことを意識していたとしても無理はない。だからこそ,バランスをとるために「間違い（規準から外れること）を恐れずに喋りましょう」という声かけがあるわけだが，経験的にこの「間違いを恐れずに喋る」というのは生徒一個人のちょっとした努力でどうにかなるというものでもないと感じている。もちろん声かけを通じて，個々に「間違いを恐れずに喋る」という意識を持たせることは必要であるが，対話者同士「喋りやすい雰囲気」を醸成していくための具体的スキルの指導が必要であろう。

３.「喋りやすい雰囲気」のために

豊田（2017）は,「「日常会話」には（略)，それを背後で支えている原理は，解放感ないしリラクゼーションと言えそうです。」と述べている。この解放感，リラクゼーションという点こそ，喋りやすい雰囲気を醸成する要素となり得るだろう。また，山﨑（2017）は,「聞き手の相づちが会話の潤滑油となり話者間の良好な関係を促進するということは想像に難くありません」と述べている。以上から,「日常会話」における言語の特徴，そして「聞き手の役割」に喋りやすい雰囲気を生み出すヒントがありそうである。

3.1.　「喋りやすい雰囲気」を作るスキル

以下，豊田（2017）と山﨑（2017）の文献から，執筆者の主観で実践に取り入れやすそうなものを引用した。

3.1.1.　省略

豊田（2017）は文の要素の省略が生み出すインフォーマルさがリラクゼーションにつながるとしている。例えば,“That sounds great.”と言うよりも,“Sounds great.”の方が,“Sounds great.”よりも“Great.”の方がより「開放感のある」表現であるとしている。

3.1.2.　言いよどみ

豊田（2017）は言いよどみの例として，ポーズ,“er”や“erm”など指示的意味を持たない音,“I mean”,“you know”,“well”などの談話標識を挙げている。その上で「緊張感をほぐすように，発話の最初にクッションをおいて言いよどみ，流れを和らげて話す方が自然で，好ましく感じられるでしょう。」と述べている。したがって，言いよどみ，つなぎ言葉の使用が効果的であると言える。

3.1.3.　繰り返し

繰り返しとは，相手や自分が言った表現を繰り返し発話することである。豊田（2017）はやりとりをする２人の反復を他者反復と自己反復に分け，他者反復が対話者動詞の一体感を高めるとしており，自己反復が気まずい沈黙を避けるのに機能していると述べている。

3.1.4.　相づち

相づちとは“Oh, no!”といった相手の発話に対しての反応である。山﨑（2017）は「お互い心情的

に寄り添うような相づちスタイルをとっており，初対面ながら心理的距離がぐっと縮まっているようです」と述べており，相づちが対話の良い雰囲気を作り出すのに機能しているとしている。

3.2. 非言語的スキル

以上に加えて，執筆者の経験上①ジェスチャー，②声の抑揚の使い分け，③表情なども喋りやすい雰囲気を作り出すのに寄与していると考えられる。

3.3. まとめ

以下の表は，それぞれのスキルを発話の主導権を持っている時（話し手）と，そうでない時（聞き手）とで区別したものである。

表１：喋りやすい雰囲気をつくるためのスキル（執筆者作成）

	スキル	目　　的
主に話し手	省略	リラックスした印象を生み出す
	言いよどみ	会話のクッション、会話の沈黙を埋める
	繰り返し	会話の沈黙を埋める
	ジェスチャー	言語で表現できない内容を補完する
	声の抑揚	目的に応じた印象を生み出す
主に聞き手	表情	相手の話を受け入れる意志を表する
	繰り返し	会話の沈黙を埋める、相手の話を理解していることを明示す
	相づち	相手に聞いていることを示し、会話の主導権を渡していることを明示する

４．スキルを活用するための活動

以上，文献調査及び執筆者の実践から，喋りやすい雰囲気をつくるためのスキルをまとめた。おおまかにまとめると，話し手は会話に沈黙を作らないこと，聞き手は会話に参加している態度を話し手に明示することと言えよう。では，こういったスキルを育成するのに適した活動としてはどのようなものがあるかを整理したい。

4.1. 対話活動の整理

豊田（2017）は話し言葉をモノローグとダイアローグの２つに分けており，本稿で扱っているやりとりはダイアローグである。また，豊田（2017）はこのダイアローグをさらに「目的志向の会話」と「目的なき会話」に分けている。それをもとに作成したのが図２である。対話の着地点の有無，特徴によって分類を試みた。

4.1.1. 着地点がずれた状態で始まる対話

具体的には，交渉，議論などの場面である。例えば，ペットを飼いたい中学生と，ペットを飼いたくない保護者がいるとして，ペットを飼いたい中学生は保護者の同意を得るべく交渉を生じさせる必要性がある。このやりとりの特徴としては，お互いに目的としているものがずれているため，相手を説得するために論理的な話し方をしたりするなど，発話が一定の規準，尺度に基づいている必要がある。また，お互いの対話における着地点をすり合わせる過程で発話量が増えていくということが考えられる。

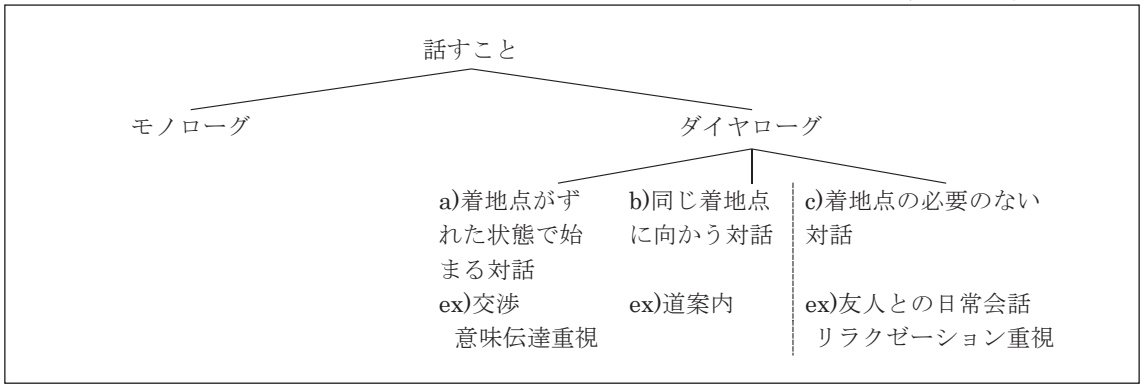

図２：話すことの整理（豊田（2017）を基に執筆者作成）

4.1.2.　同じ着地点に向かうやりとり

具体的には，道案内などの場面である。例えば，初めて訪れた地で自分が宿泊するホテルに行きたい人が，その土地をよく知っている人に道を教えてもらう際には，対話の着地点は「ホテルのある正確な道順と場所を共有すること」となる。このやりとりの特徴としては，対話の落としどころをすり合わせる過程が必要ないため，必要最低限の発話量に限られるということが考えられる。

4.1.3.　着地点の必要のないやりとり

具体的には，休憩時間における友達との日常会話などである。豊田（2017）は日常会話について「リラクゼーションという目的にかなうために，スピーチのように決まったルールもなく，言いよどみや繰り返し，それに脱線も問題なく許容され，会話がときには長時間にわたることも珍しくありません。」としている。言い換えれば，自分の発話が一定の規準，尺度に基づいているかどうかに対する制約は低いと言える（嘘をついてよいというわけではないが）。また，会話が長時間に渡る場合は発話量が増えるという特徴が考えられる。

4.2.　スキルの習得に適した活動

以上の対話活動の分類に基づき，前述のスキルの習得に適した活動を考えると，意味伝達に重きが置かれるのが，交渉や道案内といった場面での対話活動であるのに対して，リラクゼーションに重きが置かれるのが友人との日常会話といった場面での対話活動である。トピックなどを特に指定せず，時間だけ指定をしてペアで会話をさせるといったものである。意味内容に重きを置かなくてよい分，上述のスキルを行うことに認知資源を割り当てられると考えられる。一方，活動の自由度が高い分，指導者側のコントロールが効かず，体系的な指導がしにくいというデメリットもある。そこで，以下に示すような方法で体系的な指導を行った上で，Free Conversationの形で活動に取り組ませるのが効果的ではないだろうか。

5.　具体的な指導方法

上述のスキルを習得するための具体的な活動を提案したい。ここでは，ジェスチャー，省略，言いよどみ，繰り返しに絞って提案したい。

5.1.　ジェスチャー

ジェスチャーの指導については，プレゼンテーションやスピーチの指導などで様々なものが考えられるが，対話において喋りやすい雰囲気を作ることを目的としたジェスチャーは洗練された無駄のない動きよりも，即時的で少しオーバーな方が好ましいと考えている。生徒に対して「30秒間言葉を一切話さずにコミュニケーションをしなさい」という指示をして活動を行うと，言葉が制限されている分，それを補おうとしてか，様々な，またオーバーなジェスチャーと笑いが生徒から出てきた。そのジェスチャーの妥当性はともかくも，体の動きによって伝えたい内容を補完できること，そしてどの程度のオーバーリアクションが望ましいのかを具体的に示すことが出来た。

5.2.　省略

省略の指導においては，「１分間，文（節）を作ることなく語（句）だけの英語でやりとりしなさい。」という活動を行った。生徒の様子としては語（句）のみでのやりとりでも意外と（少なくともジェスチャーのみの時よりも）伝えたい内容が伝わることに気づくと同時に，文（節）を使わないことの方が意外と難しいと感じていたようであった。

5.3.　言いよどみ，繰り返し

言いよどみ，繰り返しの指導においては，教科書の対話のセクションを用いて，以下のような活動を行った。

○会話の間を埋める練習
☆以下の対話モデルの中に，繰り返し，言いよどみ・つなぎ言葉（uh / erm / well / I mean / You know）を織り交ぜて練習しましょう。
Ken : Do you have a minute?
Emma : Yes. I've just finished my homework.
Ken : Well. I have two tickets for an English rakugo show.
Emma : Lucky you.
Ken : Why don't you come with me?
Emma : Sorry. I can't.
（*NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 3*（三省堂）*Lesson 3 Get Part 1* を一部修正）

5.4.　指導を通じての気づき

以上，まとめたスキルを習得するための指導方法を提案した。前述したように要点は，話し手は会話

に沈黙をもたらさないようにすること，聞き手は会話に参加している態度を話し手に明示することと言える。当たり前であると言われればその通りだが，指導実践の中で気づいたことは，「英語を省略することは文法的間違いである」，「言いよどんだりせずにスラスラと話さなければならない」，「同じ言葉を繰り返すのはみっともない」と考えている様子が想像以上に見られたことである。こうした生徒の実態を考えると，「間違いを恐れずに喋りなさい」という声かけ以上に，「間違いだと思っていたものが，対話において重要な役割を果たしている」ということに気付かせることの方が重要ではないかという考えにいたった。

また，聞き手のスキルを活用する能力が不十分であることにも驚かされた。普段，対話と比べて，話し手から話しかけられているという意識になりにくい一斉授業を受けていることの弊害かもしれないが，生徒本人は聞いているつもりでも，表情が上手く作れない，目を合わせられない，繰り返し，相づちをうつタイミングがわからないなど，聞いていることを相手に明示するスキルの指導の重要性を痛感した。

6．今後の展望

以上，スピーキング活動をより効果的に行うための喋りやすい雰囲気を作るスキルとその習得に向けた活動・指導方法を提案した。大きくまとめると，意味伝達の周辺的要素－コミュニケーションにおける意味伝達をスムーズにする要素－の指導であると言える。これらの実践を行う中で，執筆者の実践を観察した本校の教諭からも「間違いを恐れずに英語を話そうとしている」という感想をもらった。また，執筆者自身の感触としても，これらの実践を通じてより活発にスピーキング活動を行う雰囲気が高まったと感じている。一方，Free Conversationにおいては「途中で何を話せばいいか分からなくなる」といった反応が生徒から寄せられた。これは指導の段階を話しやすい雰囲気を作るという段階から，いかに会話を広げつなげていくかという，より意味伝達における中心的なコミュニケーションスキルの指導段階へ移る必然性が生まれたことを意味していると考えており，図２でいう着地点のずれた対話，つまり交渉といった活動へと移行させていこうと考えている。その後，いかに会話を深めていくかを学ぶ活動－ディベートなど一定の規準，尺度に基づいた英語使用が求められる活動－に移行させていこうと考えている。したがって，対話の指導の大まかな流れとしては，以下のような手順が無理なく実行できるのではないかと考えている。

対話の雰囲気を作るスキルの育成
（喋りやすい雰囲気をつくるスキルの指導）
↓
対話の広げ，つなげるスキルの育成
↓
対話を深めていくスキルの育成
（正確さ，適切さ，論理性の指導）

7．まとめ

オックスフォード英語辞典の2016年度「今年の言葉」に選ばれているのが「ポスト真実」という言葉である。この言葉が意味するのは，「世論を形成する際に，客観的な事実よりも，むしろ感情や個人的信条へのアピールの方がより影響力があるような状況」とされている。言い換えると，情報の客観性や妥当性よりも，情報を受け取る人間の主観的な印象の方が影響力として優位であるということ，と解釈できる。その一方で，英語教育においては，「論理表現」という科目が導入されることが決まっているとおり，正確さ，適切さ，論理性といった，情報の確かさ，妥当性に関わる点を指導の中心に据えている。「ポスト真実」に代表される現在の社会情勢を踏まえれば必要な取り組みであるのは間違いないが，冒頭にも述べたように，正確さ，適切さ，論理性といった，言語の質をある規準や尺度に合わせていく，いわば「真面目」な方向ばかりにスポットライトが浴びせられることがかえって，学習者にコミュニケーションを敬遠させ，結果として狙わんとする学力の育成を阻害するという事態を招いているのではないだろうか。正確さ，適切さ，論理性といった，いわば「真面目」な側面を育成する機会を十分に担保するためにも，学習者にとって，コミュニケーションを近しく，楽しいものであると感じさせる必要があるだろう。その手立てとして，いわばコミュニケーションの「気楽な」側面，もし新たな観点を作るとすれば「適当さ」にスポットライトをあてて本稿にまとめたつもりである。いかにせよ，本稿にまとめたスキルを指導する際にも，指導者が鬼気迫る表情で「対話をしているときはリラックスしなければならない！」とクソ真面目に学習者に迫ったとしても，対話が盛り上がることはないであろうし，学習者が何らかの事情で喋る気分になれなければ，出てくるはずの言葉が出てこなくもなるだろう。そのことを指導者が過度に心配して右往左往しても仕方がな

く，むしろその過剰な意識が逆説的な結果を生み出してしまうだろう。そういったことを考えると，対話指導に取り組む上で指導者にも，そして学習者にも大切なことは，肩の力の抜けた「**テキトーさ**」ではないだろうか。執筆者なりの「真面目」な意見である。

[参考文献]

1）豊田昌倫,「会話の英語とは」, 豊田昌倫, 堀正広, 今林修ほか,『英語のスタイル　教えるための文体論入門』, 2017, pp.72-86

2）山﨑のぞみ,「会話のスタイル」, 豊田昌倫, 堀正広, 今林修ほか,『英語のスタイル　教えるための文体論入門』, 2017, pp.87-101

3）三省堂,『NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 3』, 2016 ,pp.24